

企業者、利潤および資本  
—カンティロンとチュルゴ—

金子 創\*

## I はじめに

経済学史上において、アダム・スミスによる古典派の形成について考える。今、古典派を生産費説体系と解釈し、生産と分配の観点からとらえる。ここでは、各財の生産要素として土地、労働および「資本」(capital) が想定され、またそれぞれの要素に対応する報酬として地代、賃金および「利潤」(profit) が何らかの決定原理を通じて定まる。それに対して、古典派に先行する多くの学説においては、生産面に関して資本の役割が認識されていたかどうかは明らかではなく、そのために分配面に関して利潤の存在やその位置づけも不明瞭であった。したがって、資本の役割の明示やそれに対応する利潤の記述がスミスの理論的な貢献と理解しうる (cf. Schumpeter 1954, 557–61/訳 334–43)。もちろん、こうした認識の枠組みはスミスのみによって形成されたとは言えない。たとえば、Aspromourgos (1996, sec. 9) によれば、スミスに先行する各学説においても生産面に関する資本の役割を示唆する記述が少なからず存在したし、また、Meek (1962, 297) によって指摘されるように、利潤という用語それ自体がそれぞれの定義で用いられた。したがって、一方で分配面に関して利潤はどのような定義で、どういった過程を通じて、どの主体に分配されると考えられていたか、といった解釈が、他方でそうした利潤は生産面における資本の役割とどのように関連していたか、といった検討が要請される。いずれにせよ、学説史上では、そうした学説・思想間における種々の概念上の変遷を経て、スミスによって古典派的枠組みが形成された、とみなされうる。

本稿では、そうした古典派における資本および利潤の概念形成に並行する認識の枠組みの変化について検討する。ここでは、特にカンティロン (Richard Cantillon, c. 1680/90–1734) とチュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot, 1727–81) との比較を通じて、その変化を概観したい。ところで、上述の資本/利潤に関する古典派的な枠組みは次の特徴をもつと考えられる。すなわち、(a) 所得の生存水準を超過する部分については通常貯蓄され、(b) 資本市場が十分に機能しており、その貯蓄は何らかの投資機会に向けられる。さらに、(c) その投資の結果として資本蓄積が実現される。<sup>1</sup> 対して、古典派に先行する諸学説がそれぞれを想定したかどうか、あるいはどのように想定したか、という点については必ずしも明らかではない。そこで本稿では、これらの条件の検討を通じて資本/利潤に関する古典派的枠組みの形成を論じることにした。

---

\* 慶応義塾大学 大学院 経済学研究科 後期博士課程。

1 Brewer (1995, 609) を参照されたい。Brewer (1995, 634–35) は、これら3つの条件によって古典派における成長 (growth) の認識を特徴づけている。これらはいずれも資本/利潤に関わる条件であり、本稿で取り扱う課題においても有用なベンチマークとなる。

さて、こうした観点からは、上で言及したようにカンティロンとチュルゴが興味深い。まず両者はともに「企業者」(entrepreneur) と呼ばれる、所得の変動の危険に直面している主体を考え、特に生産過程の局面においてその一定の役割を想定した。その企業者の所得に関して、生存水準に対する超過の、そしてその部分の貯蓄の可能性が記述されていたのであって、そのことは (a) の論点に関連する。しかし、(b) および (c) の論点に関連して、両者の想定は大きく異なっていたと考えられる。また、他方で、当初の問題意識、すなわち利潤の定義やその発生過程、あるいはそもそもそれが企業者に獲得されるか、等々の論点との関連が見出される。したがって、(a)–(c) に加えて (d) 企業者の所得が生産面における資本の役割と関連するかどうか、という想定について解釈を要する。

そこで本稿では、資本/利潤に関するカンティロン—チュルゴ—スミスの系譜上での諸概念の変遷を、上述の論点 (a)–(d) の検討によって概観した。その結果、古典派的枠組みの形成においては、経済現象を記述する上での企業者の役割に関して、一方で危険負担という側面が弱められ、他方で資本による企業の経営という側面が強められた、という解釈を得られた。また、こうした解釈に伴って、それぞれの経済の長期状態についての認識を考慮すれば、それぞれが想定した体系間のより正確な対比が可能となる。それらは、経済分析における主体 (あるいは階級) の取り扱いが変化したことに並行して、資本概念が形成されたことを示唆する。

以下、本稿の構成はつぎのようになっている。第 II 節では、カンティロンおよびチュルゴの諸概念をそれぞれ今の課題にもとづいて検討する。第 III 節では、それらの検討から得られた諸概念の変遷を整理し、結論を述べる。

## II 諸概念の検討

### 1. カンティロンにおける企業者利潤

本節では、カンティロンにおける諸概念を、論点 (a)–(d) によって検討する。カンティロンは、その小著『商業一般の本性に関する試論』(*Essai sur la nature du commerce en général*, 1755) で、原理的には土地と労働のみを生産要素とみなしたのであって (*Essai* 1/訳 1)、資本利潤を認識していたとは言えない。<sup>2</sup> しかし、「利潤」という用語が (原理的とは言えない文脈で) 記述されていた (*Essai* 29/訳 34) ことから、本稿ではその概念についての検討を要する。

そこで、まずその利潤を獲得しうる主体の記述に着目する。カンティロンは、一国の階級を地主と

---

2 こうしたカンティロンにおける生産と分配の齟齬および資本の位置づけに関しては、Aspromougos (1996, 116–19)、金子 (2012, 93–94) を参照されたい。他方で、Prendergast (1991) は、カンティロンが利潤率均等化のメカニズムを示唆していたと解釈し、ついで資本利潤の可能性を指摘する。この点に関して、Brewer (1992, chap. 4) は、カンティロンにおける資本利潤を認めないものの、均等化に関する解釈には同意している。

それ以外とに区別し (*Essai* 25/訳 30), さらに後者を「給与の取得者」 (*gens à gages*) と「企業者」とに分けた (*Essai* 31/訳 37–38). ここで後者の分類に関して, 給与の取得者は一定の賃金の下で労働する主体を, また, 企業者は (既に述べたように) その所得が変動しうる主体を意味している.<sup>3</sup> したがって, こうした企業者の所得の構成が課題上の興味となる. たとえば, Prendergast (1991, 428) によれば, カンティロンにおいて (a) 利潤は生存水準を上回る所得の部分を意味し, (一定の生存水準を所与とすれば) 企業者の定義からその所得として超過利潤が発生しうる (し, 他方で生存水準を下回りうる). さらに, (d) そうした超過利潤は, (上述の定義からして) 資本と本質的に関連せず (*Essai*, 31–32/訳 38), したがって企業者の危険負担機能によって発生していることになる.<sup>4</sup>

さて, カンティロンは, 企業者の超過利潤が発生しうることを想定したが (*Essai* 69, 112/訳 81, 129–30),<sup>5</sup> (b) それが蓄積された場合の用途として (明示的には) 土地の購入のみを記述した (*Essai* 32, 121/訳 38, 141–42).<sup>6</sup> したがって, (c) 生産過程において資本蓄積が実現すると想定されていたかどうかは明らかではない. 実際, カンティロンにおいてそうした資本蓄積を通じた長期的な経済成長といった想定はほとんど認められない (cf. Brewer 1995, 616).

## 2. チュルゴにおける資本による企業経営

つぎにチュルゴについて検討する. チュルゴは (主に) 『富の形成と分配にかんする諸考察』 (*Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, 1766, 以下『諸考察』) で, 資本/利潤の役割の認識を明確に示したのであって, この観点からは本質的にスミスと区別されない.<sup>7</sup> チュル

---

3 本稿では特に企業者に着目するが, カンティロンは (経済全体の記述という意味では) むしろ地主の計画者としての役割を強調した. たとえば, Brewer (1988; 1992, chs. 2, 5), Berdell (2009), Kaneko (2012) を参照されたい.

4 たとえば, Brewer (1988, 7), Aspromourgos (2012a, 114–15), 金子 (2012, 87) を参照されたい. Aspromourgos (2012a, 116) によれば, カンティロンにおいては企業者機能として労働のような (labour-like) 性質—たとえば, 監督能力—が含意されていた (*Essai* 23/訳 27–28; cf. 金子 2012, 87–90) と考えられる. また, 金子 (2012, 93–94) によれば, そうした性質は信用力 (credit-worthiness) を意味していたのであって, その信用力と資本とが関連づけられていた可能性は十分に考えられる.

5 ただし, 該当の引用箇所は, 厳密には生存水準に対してではなく, 地代および前払い等を含めた部分に対する超過部分を意味している. そのとき, こうした超過部分が資本利子 (利潤) とどのような関係にある (と想定された) かは依然として不明瞭である.

6 Berdell (2009, 241–43) によれば, カンティロンが記述した企業者による地主からの土地所有権の購入は, 流動的な階級を想定したことを示唆する.

7 生産面における資本の貢献と分配面における利潤の分類, それぞれの認識という意味では Meek (1967, 30–31), Groenewegen (1968, 286–87; 1983, 588–89) を参照されたい. さらに, Brewer (1987, 426) によれば, チュルゴにおいては資本利潤 (利子) 率の均等化原理やマルサス・ウェスト・リカードの地代/利潤理論—すなわち, 地代の発生しない限界地における条件から利潤率が定まる—が実質的に記述されていたととらえられる.

ゴは、主体に関して、「企業者」をカンティロンと同様の意味によって定義したが (*Réflexions* 569, 570, 601/訳 98, 99, 123),<sup>8</sup> それにも関わらず, (d) そうした危険負担機能に対する報酬と資本に対する報酬とを明確に区別した (*Réflexions* 591–93/訳 115–17).<sup>9</sup>

いずれにせよ, (a) それらを併せた報酬は, 受け取る主体の生存水準に対する超過部分を構成しうる. ひとたびそうした所得部分の獲得が可能になるならば, その主体はその超過を貯蓄することに動機づけられていると想定された (*Réflexions* 562–63/訳 93–94; cf. Brewer 1995, 630). 実際, チュルゴは, そうした超過部分の貯蓄を前提に (b) そこから貯蓄がただちに (*sur-le-champ*) 何らかの投資機会に向けられると想定し (*Réflexions* 589/訳 114),<sup>10</sup> したがって (c) 貯蓄に対する動機づけが維持される限りでは資本蓄積が実現される, と記述した (*Réflexions* 575, 588/訳 103–4, 113–14).<sup>11</sup>

### III 学説史上における位置づけ

以上で検討されたカンティロンおよびチュルゴの諸概念を整理する. (d) カンティロンは分配に関して, 利潤を企業者の—労働 (のような) 活動や資本が混在する—危険負担機能に求めたが (cf. 脚注 4), チュルゴはそれらを明確に区別し, 資本利潤をも明確に認識していた. しかし, カンティロン, チュルゴはともに企業者を同様の意味で定義していたのであって, その企業者の活動が生産過程における役割に関しても共通点をもつことに注意されたい. なぜなら, チュルゴは, 分配面において危険, 労働 (のような) 活動および資本に対する報酬を区別していたのだとしても, 生産面においては, それらが相まって企業者の役割をなしていたと考えられるからである (cf. 脚注 4, 9). いずれにせよ, (a) それぞれにおける企業者の利潤は生存水準に対する超過部分を構成すると想定され, 少なくともチュルゴは, それが通常貯蓄されると記述した. ついで, (b) カンティロンはそうした超過が貯蓄される場合に—そもそも, それが通常貯蓄されるかどうか明示的ではないが—, 土地の購入に向けられるとしたのに対して, チュルゴは生産過程における前払いを構成するとした (cf. 脚注 10). その結果として (c) 両者は資本蓄積の有無に関してまったく異なる想定を与えたと

8 また、『諸考察』以外の文献においても, 企業者の危険負担機能に関する記述は確認される (e.g., Trugot 1770b, 292/tr. 170).

9 Asprougourgos (2012b, 12–13) によれば, チュルゴにおける危険に対する報酬は, 資本に対する報酬だけでなく, 労働のような性質—たとえば, 監督能力—に対する報酬も区別された. 脚注 4 も参照されたい.

10 チュルゴは投資先として (1) 土地の購入, (2) 製造業, (3) 農業, (4) 商業, それぞれへの自己金融および (5) 貸付を想定した (cf. Murphy 2009, 146–47). ここで, (2)–(4) によってはただちに, また (5) によっても借り入れた側において前払い部分を構成 (すると仮定) し, したがって生産過程に投入される. このことはチュルゴによる貯蓄と投資との関係づけを表している (cf. Groenewegen 1968, 278–79; 1971, 331–33).

11 また、『諸考察』以外の文献においては, より明示的に長期に渡る資本蓄積が記述された (e.g., Trugot 1770a, 187/tr. 160; cf. Brewer 1995, 630).

考えられる。

さて、カンティロンとチュルゴとは、生産面における主体の役割に関して想定を共有していた。しかし、分配面に関して、チュルゴが本質的に古典派的な枠組みにもとづいたのに対して、カンティロンの扱いは混然としており、しかし危険負担を強調して記述した。こうした比較は、利潤が危険負担のみによって説明しうるという認識から、いくつかの要因から説明されるという認識—すなわち、危険負担はその1つに過ぎない—への変化を示唆する。したがって、資本/利潤の古典派的枠組みはそうした認識の変化と並行して形成されたと考えられる。また、そもそも、企業者の利潤が危険負担のみによって説明されることは、その必然的な発生についての根拠を記述しえないことに注意されたい。Brewer (1995, 616) によれば、カンティロンにおいては長期的な成長についての認識が存在せず、そのことは (c) 資本蓄積の経路が認められていなかったことを含意するが、それは (a) 企業者の貯蓄への動機づけや (b) 生産過程への再投入の経路、あるいは (d) 利潤部分の必然的な根拠、が明示的でないことの一因をなすととらえられるのである。

ここでは、カンティロンおよびチュルゴの諸概念の関係のみを扱った。もちろん、それらは両者の社会や制度の観測にもとづいて構築された、それぞれの枠組みをなしているのであって、そこには現実と分析との一定の関係が何らかの形で表れているであろう。本稿では、現実の制度と経済分析、それぞれの変化の関係を、階級と資本概念との形成の関係を一例に論じた。

## 参考文献

- Aspromourgos, T. 1996. *On the Origins of Classical Economics: Distribution and Value from Petty to Adam Smith*. New York: Routledge.
- . 2012a. Entrepreneurship, Risk and Income Distribution in Cantillon's *Essai*. In *Classical Political Economy and Modern Theory: Essays in Honour of Heinz Kurz*. Edited by C. Gehrke, N. Salvadori, I. Steedman, and R. Sturm. London: Routledge:105–19.
- . 2012b. Entrepreneurship, Risk and Income Distribution in Adam Smith. *European Journal of the History of Economic Thought*, iFirst article:1–20.
- Berdell, J. 2009. Interdependence and Independence in Cantillon's *Essai*. *European Journal of the History of Economic Thought* 16.2:221–49.
- Brewer, A. 1987. Turgot: Founder of Classical Economics. *Economica* 54.216:417–28.
- . 1988. Cantillon and the Land Theory of Value. *History of Political Economy* 20.1:1–14.
- . 1992. *Richard Cantillon: Pioneer of Economic Theory*. New York: Routledge.
- . 1995. The Concept of Growth in Eighteenth-Century Economics. *History of Political Economy* 27.4:609–38.
- Cantillon, R. [1755] 1952. *Essai sur la nature du commerce en général: traduit de l'anglais*. Londres: Chez Fletcher Gyles. Edited by Institut National d'Études Démographiques. Paris.

- [*Essai*]. 津田内匠訳『商業試論』所収, 名古屋大学出版会, 1992:vii–xii, 3–211.
- Groenewegen, P. D. 1968. Turgot and Adam Smith. *Scottish Journal of Political Economy* 15.3:271–87.
- . 1971. A Reinterpretation of Turgot's Theory of Capital and Interest. *Economic Journal* 81.322:327–40.
- , ed. 1977. *The Economics of A. R. J. Turgot*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1983. Turgot's Place in the History of Economic Thought: A Bicentenary Estimate. *History of Political Economy* 15.4:585–616.
- Kaneko, S. 2012. Cantillon on Value: A Rational Reconstruction of the Roles of Landownership. KES Discussion Paper Series, Graduate Student No. 12–1. Keio University.
- Meek, R. L. 1962. *The Economics of Physiocracy: Essays and Translations*. London: George Allen & Unwin.
- . 1967. *Economics and Ideology and Other Essays: Studies in the Development of Economic Thought*. London: Chapman & Hall.
- Murphy, A. E. 2009. *The Genesis of Macroeconomics: New Ideas from Sir William Petty to Henry Thornton*. New York: Oxford University Press.
- Prendergast, R. 1991. Cantillon and the Emergence of Theory of Profit. *History of Political Economy* 23.3:419–29.
- Schumpeter, J. A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史 (中)』岩波書店, 2006.
- Turgot, A. R. J. [1766] 1913–1923. *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*. In *Œuvres de Turgot et documents le concernant: avec biographi et notes*. II. Edited by G. Schelle. Paris: Librairie Félix Alcan:533–601. [*Réflexions*]. 津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』所収, 岩波書店, 1962:70–124.
- . [1770a] 1913–1923. *Mémoire sur les plêts d'argent*. In *Œuvres de Turgot et documents le concernant: avec biographi et notes*. III. Edited by G. Schelle. Paris: Librairie Félix Alcan:155–202. English translation in Groenewegen (1977):149–163.
- . [1770b] 1913–1923. *Lettres au Contrôleur Général (abbé Terray) sur le Commerce des Grains*. In *Œuvres de Turgot et documents le concernant: avec biographi et notes*. III. Edited by G. Schelle. Paris: Librairie Félix Alcan:265–369. English translation in Groenewegen (1977):164–181.
- 金子創. 2012. 「カンティロン」の「利潤」概念—「内在価値」および「企業者」との整合的解釈を通じて『経済学史研究』 54.1:83–101.